1月12日、正月気分最後のプログラム「スロヴァキア室内オーケストラ＆錦織健」(独立・国交20周年)コンサートへ行き、その足で銀座へ直行。シャンソン・フランセーズの新年会に参加させていただいた。乾杯が終わり「つきだし」に目をやると芋の丸餅（関西風）雑煮仕立て。「居酒屋もやるね、正月は！」と感心したところから江戸・イタリア・フランスの正月に話が飛び、そこからクリスマスと正月の境目：12月25日説と1月6日説を巡りフランシスコ・ザビエルとイエズス会―ロシア正教―日本の教会と宗教観へと話が進展し、最後の蕎麦の「江戸っ子の食べ方指南」でお開き。だが、ここで終わる会ではない。フランス風カフェへ場所を移すもオーダーはやはり赤ワイン。白しか飲まなかった私は、この会のお蔭で赤も飲めるようになった。アルコールの後は甘いものが欲しくなり、必ず苦味で締めたい私は当然ケーキとコーヒーを頼む。大概はそこで終わる。だがこの日はワインに詳しい集団がきょうのワインをやたら褒めるものだから「おいしい＝試してしかるべき」が常なる私は予定外の1杯を味わった。他の人は当然杯を重ねる。だが彼らは唯の呑兵衛集団ではない。たとえアルコールの中で脳が水泳をしていても、本道シャンソン・フランセーズへと話が真っ直ぐに進む。そして話が過熱する中で「仏・仏辞典を買いなさい！」とO先生と語学出版社勤務H氏のダブル・パンチが私に飛んできた。「日本人感覚の訳ではダメだから、フランス人感覚を理解せよ」ということだ。私はそれを素直に聞き入れた。

さて、それから数日後、フランス図書専門店へ入るや否や、私はレジ近辺に立っている人に「仏・仏辞典が欲しいのですが、何かお薦めはありますか？」といきなり尋ねた。まるでレストランのメニューを尋ねるがごとく。すると申し合わせたようにレジの後ろにその辞書が並んでいてサッと目の前で開いてくれた。恐るべき最短の展開。４種類ある中でポケット版は持ち運び出来るが内容省略型と思ったのでパス。①絵の入っているもの　②フランス人が外国人向けに書いたもの(改訂なし)　③フランス人によるフランス人向けのもの(1年毎改訂で②の倍額)―選択肢はこの3点。さて無駄な買い替えは嫌だ。どうしたものかと思って尋ねてみると「好みや相性がありますから」という。因みに絵の入っているものは女性に人気だそうだ。同じ単語の載っているページを開いて横に並べて見比べてみる。結局「価格は痛いが改訂があっても基本はそう大して変わるまい」と、思い切って感覚で③を選んだ。後のことは何も考えずに。

そうして家に帰って少し読んでみると「何だか国語の辞書みたい」それはそうだ、よく考えたらフランス人の国語辞書ではないか。一例で「空 LE CIEL」という語句を引いてみると「地平線によって区切られている我々の頭上の空間」とある。日本の国語辞書には「地面の上方の空間」とある。フランス語の視界は広く、日本の視界は深い。またフランスでは具体的宗教観、日本では森羅万象の「畏敬」が含まれる。そこから自分の内側から外へ向かうか、外側の世界から自分を見つめるかのスタンスの違いが出てくる。それが「仏・和辞典」と「仏・仏辞典」の違いと言えるかもしれない。

ところで厚さ約7cm、手持ちの2㎏の秤では計りきれないほど重いこの辞書を一体どこに置こうか？本棚にはスペースがない。けれど必要なものは必要な場所に収まるだろう。何はともあれ、相性で選んだこの同居者を床に落とさないように(片手で持ってページを繰ってすでに1回落とした)しっかり持つことが肝要である。(2013.1.19)